

学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

研究主題

「読む力」を鍛え、思考力・判断力・表現力を育む授業づくり

土佐清水市立清水中学校

実践概要：

学習の基盤となる「読む力」を鍛えることに重点を置き、国語科のみでなく全ての教科において授業改善の取組を行った。月に1度行われる研究推進委員会で、課題を出し合い研究の方向性を決定し、全校研や教科部会で意見を出し合いながら研究を進めた。

1年目は、「読む力」の育成に向けて積極的に図書館資料・新聞を使った授業の取組を進めた。また、全教室にリストブック掲載図書を常備し、読書活動の推進を図った。

2年目は、「生徒に課題意識をもたせる（めあてや課題の工夫・改善）」ことを授業改善の視点として、清水中授業スタンダードの見直し、徹底を図った。また、目指す授業の方向性について全教科、全教職員での統一を図った。

そのほか、言語能力、情報活用能力の育成に向けて、学校図書館の効果的な活用を図ったり、学校図書館の利用者増加のための取組を進めた。

さらに、表現力の育成に向けて、学級での人間関係づくりプログラムの実施、終学活や学年集会での発表の機会の充実等に取り組んだ。

キーワード：図書館資料の活用、読書の推進、目指す授業の統一

1. 研究仮説

以下の研究に取り組むことで、「読む力」が鍛えられ、個々の生徒の「思考力・判断力・表現力」が育成されるであろう。

- ① 各教科等との関連を図りながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりの実践研究に取り組む。
- ② 学校図書館を計画的に活用し、各教科で「読む力」を鍛え、言語能力及び情報活用能力の向上を図る授業づくりの実践研究に取り組む。
- ③ 仲間づくりを通して、自分の思いや考えを表現し合い、生徒の主体性や互いに学び合う姿勢を育てる実践研究に取り組む。

2. 実践方法

- (1) 各教科等における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、「聴く力・読み取る力・考える力・表現する力」の四つの柱の育成を目指すスタンダードに則った授業づくりの実践研究及び評価方法の研究

①研究授業

- ・各教科会で、年間図書資料・新聞活用計画を立て、推進教諭と確認
- ・西部教育事務所の指導主事と共に、各教科会（推進教諭、教頭、研究主任等も適宜参加）で指導案検討の実施
- ・公開授業、協議等で、【1. 図書館資料・新聞の活用は適切だったか、2. めあての設定は良かったか、3. 生徒が表現し、考えることができていたか】を、全教員で協議し、課題を確認
- ・協議内容を推進教諭が校内研究通信にまとめ、全教員で共有

- ・研究推進委員会で、今後の取組について確認

②授業スタイルの統一

- ・授業で使用する全教室に、「めあて」「まとめ」「振り返り」「本時の流れ」の提示物を揃え、全教員で授業スタイルを統一

- (2) 学校図書館の計画的な活用及び図書館資料や新聞を活用し、言語能力、情報活用能力の向上を図る授業づくりの研究・推進

①図書館資料、新聞記事の収集

- ・図書館資料・新聞活用年間計画を、各教科会で作成
- ・学校図書館において、授業で使用する図書の確認、選書及び検討
- ・図書館資料を使う際、市民図書館やオーテピア高知図書館など、公共の図書館を活用
- ・新聞記事の収集の際、高知新聞清水支社等を活用

②新聞づくりや読書感想文の取組による、言語能力、情報活用能力の育成

- ・高知新聞社の記者の方を招聘し、新聞づくりの基礎基本を学ぶ機会の確保
- ・読書感想文の選書、書き方指導の実施

③読書の推進、図書委員会との連携

- ・リストブック掲載図書と辞書が入れられる本棚を全学級に配置
- ・月ごとに学校図書館前に飾る図書を選定し、掲示（並行読書も含む）
- ・図書委員会の中で「全校に読んでほしい本」を話し合い、テーマ・ジャンルを絞り、選書を実施
- ・図書委員おすすめ図書を学校図書館前に、生徒の作ったポップと共に掲示

- (3) 伝え合う力、コミュニケーション力、表現力、語彙力の育成を図る

①仲間づくり部会の取組

- ・全学年で統一した取組ができるよう、研究推進委員会で方向性を決め、仲間づくり部会で具体的取組の決定、実施
- ・学年、学級での人間関係づくりプログラムの実施、終学活や学年集会での発表の機会の充実

3. 実践内容

- (1) 各教科等における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、「聴く力・読み取る力・考える力・表現する力」の四つの柱の育成を目指すスタンダードに則った授業づくりの実践研究及び評価方法の研究

①研究授業

1年目の課題として、【基礎・基本の定着が弱い】【語彙力の不足】【文章や資料を正確に読み取る力が弱い】【自分の考えを表現する力が弱い】という課題が浮かび上がってきた。そこで、2年目の年度当初に、全教職員で、「生徒が『分かった、できた』と思える授業を目指す」ことを確認した。そのために、清水中の4本柱「聴く力・読み取る力・考える力・表現する力」を基本とした清水中スタンダードの見直しを行い、全教職員で授業の型を確認し、実践した。

公開授業においては、「めあては分かりやすかったか」「考える活動はできていたか（個人・ペア・班などの活動は生徒の思考を深めるうえで効果的であったか）」「表現することはできていたか（自分の言葉で考えを構築することができていたか）」という3点に視点を絞り、研究協議を行った。「考える」については、「学びをより深いものにしていくための活動について、形だけの活動にならないよう、班の使い方や話し合いの中身について再度考えていくこと」「協働する中で気づきや発見を、深い学びにつなげていくこと」など、深く学ぶための工夫について確認した。「表現する」については、「活発な意見は出るが、特定の生徒の意見で授業が進んでしまう」という課題について「発言のルールを作る」ことを確認して取り組んだ。

また、公開授業後には、研究協議で出た意見を校内研究便りにまとめて全教職員に配付、周知した。各教科ごとに出た「良かった点、改善点、今後に向けて」をまとめ、授業改善につなげていった。

②授業スタイルの統一

1年目の初めに、理科の提案授業を全教職員で参観し、事後協議の中で出された本校生徒の課題「しっかり聴き取る力、読み取る力、根気強くやりきる力の不足」について改善策を検討した。本校の授業スタンダードの徹底を全教科等で図り、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて取り組んでいくために【①意欲を喚起する課題提示の工夫②課題に対して自分の考えをもたせる工夫③考えを共有し

深めるために効果的な形態の工夫④話し方、説明や指示の工夫⑤全ての生徒に出番を与える授業の工夫】に、意識して取り組んでいくことを確認した。中でも、「授業スタンダード（学習課題の設定や提示の工夫、個人思考の設定や時間の確保、話し合いのさせ方や視覚化の工夫）を大切にし、深い学びにつなげる工夫がされているか」「自分の考えを根拠を明確にして相手に伝えることや言語能力の育成に向けた取組の工夫がされているか」については、研究授業後の協議でも毎回議題に出し、授業スタイルや表現活動について意見交換を重ねた。この積み重ねによって、授業スタンダードの流れを全教職員が意識し、意見交流の際は、一問一答にならない工夫をするなど、清水中としての授業スタイルが確立した。

2年目は「めあて」に焦点を当てて研究を進めた。「国語科授業づくり講座」の講師である松永立志先生の、「めあてを指導事項のままに書くと、抽象度が高く、生徒にとって指導内容（何を教わったか、何の力がついたのか）が不明瞭になってしまう。これによって評価も曖昧になってしまうため、生徒が何を教わるのか、見通しがもて、何の力がつくのかが分かるめあてにしていくべきだ」という講話に基づき、「生徒が「分かった、できた」と思える授業をつくるためにはまず、「めあて」の設定から全教職員で統一を図っていくべきであると考え、研究推進委員会で目指すべき「めあて」について話し合った。教師が本時で「何が、どのように」できていればよいのかといったゴールを明確にもち、「どのようにして」「何に着目して」といった、生徒が考える際のポイントを入れ、生徒の意欲をかき立て、見通しがもてるような具体的な「めあて」を提示することを、校内研の中で全教職員に確認し、各授業の中で意識して取り組んだ。

また、「めあて」「まとめ」「振り返り」以外にも、生徒が見通しをもって授業に臨めるように、「本時の流れ」の掲示物を各教室に常備した。掲示物があることで、全教職員が流れを書くように意識することにつながった。

- (2) 学校図書館の計画的な活用及び図書館資料や新聞を活用し、言語能力、情報活用能力の向上を図る授業づくりの研究・推進

①図書館資料、新聞記事の収集

学期初めの教科会で、図書館資料、新聞活用年間計画を立て、推進教諭がそれを把握した。1年目は、学校図書館に足を運ぶことが少ない教員に授業で活用できる図書館資料を見つけてもらうための機会を設定するために、教科会を学校図書館で行うこととし、学校にどんな本があるのかを全ての教員が見ることができるよう機会を設けた。選書を兼ねて、授業で使えそうな本を探し、活用できるように働きかけた。

また、新聞については、各教科担当教員から、

どのような単元の、どのような場面で、どのような記事が活用できそうかを聞き取り、高知新聞清水支社との連携を図って必要な記事の収集を行った。記者と各担当教員で、より生徒の思考が深まる、適切な記事の選定に努めた。新聞社と連携を図ったことで、多様な情報の中から授業に適した資料を選定することができ、効果的な新聞活用につなげることができた。

②新聞づくりや読書感想文の取組による、言語能力、情報活用能力の育成

新聞づくりについては、年度当初に全学年で総合的な学習の時間のまとめとして新聞を作成するよう確認し、各自が総合的な学習の時間で情報収集したり体験したりしたことをまとめ、仲間に伝えるために全学年で新聞づくりを行った。また1年生は、1学期に高知新聞社の方を招き、新聞作成の学習会を行った。授業や校内文化祭で、作成した新聞を使った発表を行い、また、校内や文化祭での掲示をした。

読書感想文は、国語教科部会で話し合い、「より深く読書し、読書で得た感動を文章に表現することを通して、豊かな人間性や考える力を育み、自分の考えを正しい日本語で表現する力を養うこと」を目指し、全校生徒で取り組んだ。その際、「感動を伝えたいと思った本で感想文を書く」「読みながら、おもしろかった、感動した場面に印を付け、なぜそう思ったのかメモをしておく」「自分の感動が伝わるよう、文章の構成を考えて書く」「本を通して学んだこと、考えたことも入れて書く」等を確認した。以上のことを踏まえ、夏休み前に国語科の授業の中で統一した指導を行った。

(3) 伝え合う力、コミュニケーション力、表現力、語彙力の育成を図る

①仲間づくり部会の取組

全学年で統一した取組ができるよう、研究推進委員会（管理職・主幹教諭・研究主任・推進教諭・学力向上部会長・仲間づくり部会長で構成）で方向性を決め、仲間づくり部会で具体的な取組を話し合い、以下のようなことを提案し取り組んだ。

【学年、学級での人間関係づくりプログラムの実施】

「ペアや班活動を通して学び合いができる学級」を目指し、毎学期、学級活動や行事の中で仲間づくり活動（自己開示、基礎コミュニケーション、アサーション等）を行った。その中でも大きな活動は、「エンジェルハート」と「ありがとうメッセージ」といった、構成的グループエンカウンターである。

これらの取組は、生徒間の良好な関係づくりから、自己理解、他者理解につなげることで、班での学び合い等が円滑に進められること、主体性を育てることを目的として、2年間を通して行った。

【終学活や学年集会での発表の機会の充実】

自分の思いや考えを分かりやすく伝える力を育成するために、全職員で自分の意見を班会で

発表させるための手立てを確認し、1分間スピーチの実施等に取り組んだ。また、毎日の班会で1日の振り返りを全員で伝え合うことを確認し、各学級で担任、副担任が意識させながら取組を進めた。1分間スピーチは、1年目はフリーテーマだったため、話す内容に深まりがないという反省点が上がった。そのため、2年目は学年、学級によってテーマを決め、事前に原稿を書かせてから、原稿を基に発表させるようにした。この取組によって相手を意識しながら、より深い内容の話をすることができるようになった。

また、班会の発表や教科委員からの発表では、相手意識をもたせ、手元のメモを読みながら話すのではなく、「相手に自分の言葉で伝える」ということに全学年で共通して取り組んだ。全校集会の際の発表においても同様の取組を行った。生徒会専門部からの発表の指導は、各専門部会の教員が中心に行い、学校全体で「相手に伝える」という意識を生徒にもたせながら、伝え合う力、コミュニケーション力、表現力、語彙力の育成に努めてきた。学年集会についても月1回に定例化し、生徒の発表の機会を増やした。

4. 成果と課題

・平成30年度「高知県学力定着状況調査」

	国語	社会	数学	理科	英語	平均
1年	69.0 ±0	54.2 -2.3	69.2 +6.6	60.5 +3.4	53.4 -6.5	61.3 +0.2
2年	69.1 -2.1	50.6 -7.5	50.3 -1.6	48.1 -5.7	37.9 -17.9	51.2 -7.0

(表の下段は全国平均との比較 以下同様)

・令和元年度「高知県学力定着状況調査」

	国語	社会	数学	理科	英語	平均
1年	59.7 -5.2	51.7 -3.6	53.8 -2.8	50.0 -4.5	48.8 -13.8	52.8 -6.0
2年	64.1 -1.6	46.6 -2.8	57.5 +5.4	59.2 +0.9	50.9 -6.4	55.7 -0.9

・平成30年度「全国学力・学習状況調査」

国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	理科	平均
79	62	68	46	66	
+4P	+2P	+4P	+3P	+2P	+3P

・平成31年度「全国学力・学習状況調査」

国語	数学	英語
72	58	48
-0.2P	-1.8P	-8.0P

・「授業力チェックシート」

(H30 7月)

	教材研究	授業構成	指導技術	生徒理解	平均
生徒	3.7	3.6	3.4	3.7	3.6
教師	2.8	2.8	2.8	3.1	2.9

(H30 12月)

	教材研究	授業構成	指導技術	生徒理解	平均
生徒	3.7	3.6	3.6	3.8	3.7
教師	2.9	3.0	2.9	3.2	3.0

(H31 7月)

	教材研究	授業構成	指導技術	生徒理解	平均
生徒	3.7	3.7	3.6	3.8	3.8
教師	2.6	3.0	2.7	2.7	2.8

(H31 12月)

	教材研究	授業構成	指導技術	生徒理解	平均
生徒	3.8	3.8	3.6	3.8	3.8
教師	2.9	3.2	2.5	3.1	3.3

(1) 成果

○全校で統一した授業スタイルの確立

研究主任を中心に、校内研究推進委員会で見直した、清水中授業スタンダードを基にした授業が全教職員に定着してきた。特に令和元年度は、全教職員で「どのようにして」「何に注目して」という視点に基づいためあての設定を意識しながら取り組んできた。「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の流れが定着し、1時間の見通しがもてる授業になってきた。

また、書くことに関しては、毎時間の振り返り、日々の生活日誌、作文の取組など、書く場面を多く設定したことにより、書くことに対する抵抗は全体的に少なくなり、記述式問題の無解答率の低下や、正答率の向上、「書く意欲」の向上に繋がっていると考えられる。

外部講師招聘の学習会や指導案検討会、研究授業事前事後研究会を企画し、積極的に授業改善を図ってきたことや、公開授業で授業の視点を明らかにし、授業者と参観者が意識して振り返りを行えるよう努めてきたことが、授業改善への意識の向上につながった。

○学校図書館の積極的な利用促進

学校図書館の活用において、各教科等で使用できる図書や購入希望図書の選定を目的とした学校図書館活用のための教科部会を開催したことで、各教科等の授業と関連させて図書館資料を活用することができた。

図書委員会と連携して、学校図書館の利用者を増やすための本の選書や掲示を行ったことにより、3学期は2学期と比較すると来館者数が約2倍に増え、貸出冊数も増えている。

(2) 課題

○記述式問題から見える読解力の弱さ

各教科等において、「資料を的確に読み取ることができていない」「条件に従って書くことができない」という共通した課題が出てきた。

これは、「書く力」だけでなく、問題文を「読む力」も関係していると考え、国語科では、1学期に1～2回、各学年において、条件作文に取り組んだ。作文を書く前には条件を全体で確認し、書かせた後に、条件をきちんと満たしているか、確認させ、添削し、コメントを付けて返却した。今後、文章を丁寧に読み、条件に従って正確に答える指導を、国語科のみでなく、全教科統一して行っていく必要がある。また、日々の授業の振り返りを、条件を出して書かせている教科もあり、このような取組の積み重ねが、記述式問題の正答率の向上にもつながっていくと考える。この取組についても全教科等に浸透していないので、全体で再度確認し、全教科等で取り組んでいく必要がある。

また、無解答の生徒の多くは、問題を読み、考え、解答するまでの時間がかかり過ぎて、最後の記述式問題まで到達していなかった。このことから、練習問題等で様々な文章に触れ、問題を解いていくことで、速読の力も付けていく必要があると考える。

○学校図書館の計画的な活用

学校図書館を更に有効に活用するために、今年度の学校図書館の活用の見直しを図り、教員だけでなく、生徒が必要を感じた時に主体的に図書館資料を手にとれるよう、教科担当との連携をさらに深め、学習活動の支援を行う必要がある。図書館資料、新聞活用計画の見直しと、活用履歴を残していき、来年度につなげる取組をしていく必要がある。

○生徒の学習意欲を喚起する「めあて」「学習課題」の設定の工夫

令和元年度は、「めあて」の内容について全教職員が意識しながら取り組んできた。平成30年度より、具体性のあるものになり、少しずつ意識は統一されてきている。生徒は与えられた課題には真面目に取り組むことができるが、主体的な学びにという点では弱さが見られる。これは、課題やめあての多くが教員主導で提示されているため、生徒の学びを受け身にしてしまっていることが一つの要因であると考えられる。生徒にめあてを考えさせたり、生徒のつぶやきからめあてを設定したりしている教科もある。生徒が意欲的に自分事として取り組もうと思える「めあて」の設定について再度、生徒目線の「めあて」、生徒自らが主体的に課題解決に向かえるような課題設定の工夫を全教科等で仕組んでいく必要がある。